小浜町文化財調査報告書第２集

湾頭遺跡

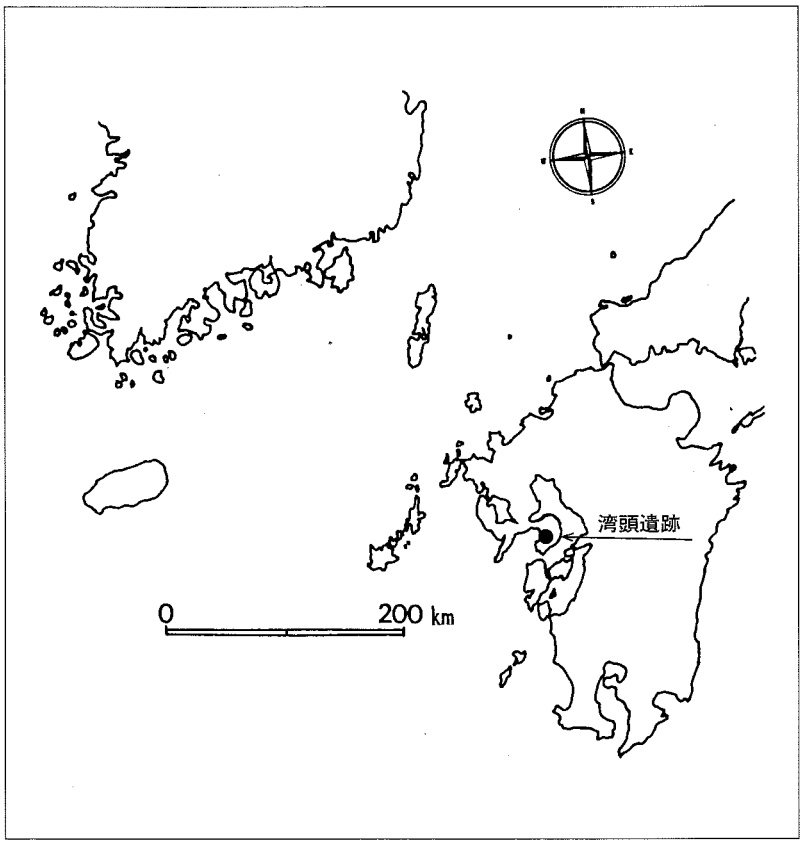
（わんどう）

1995

長崎県小浜町教育委員会

小浜町文化財調査報告書第２集

湾頭遺跡



1995

長崎県小浜町教育委員会

湾頭遺跡報告書の発刊にあたり

小浜町における県営畑地帯総合土地改良事業計画区域の中に湾頭遺跡範囲が包含されていたため，平成５年度範囲確認のための試掘を実施，平成６年度において本調査の発掘を行いました。本報告書はこれをまとめたものであります。

発掘の結果，縄文～弥生の石器・土器等50点とともに黒曜石剝片等が出土しました。また，中世末から近世初頭にかけての明の染付片，摺鉢片，波佐見初期の陶磁器片も出土しました。このほか堀立柱建物跡２戸の遺構も検出されています。詳細は本文に述べたとおりであります。

「湾頭」地区は標高120メートルの台地であります。ここに住みついた遠い祖先は，台地の裾に寄せる天草灘の群青の海原を見遙かしながら，どのような生活を続けていたのでしょうか。最近の埋蔵文化財の研究成果は，私達に限りないロマンを与えてくれます。

本調査にあたって，県文化課の懇切なご指導を頂いて，本調査を実施することができました。直接ご指導下さった関係者の皆様に心からお礼を申し上げる次第であります。

平成７年３月

小浜町教育委員会教育長

元　村　　勉

例　　言

1．本書は県営畑地帯総合土地改良事業に伴う，南高来郡小浜町山畑地区所在の湾頭遺跡緊急発掘調査の報告書である。

2．調査は，小浜町教育委員会のもとに，長崎県文化課が協力して調査の記録保存を行ったものである。

3．調査の写真撮影は，範囲確認調査では町田が，本調査では高野・村川・松尾が行った。報告書中の遺物の撮影は村川が行った。

4．本書の執筆および編集は，村川の協力により松尾が行った。図版の編集においては塩塚浩一の協力を得た。また，遺物の実測，トレース等において徳永妙子，川脇いつ子，斉藤いづみ，安部淳子，近藤千鶴の助力を得た。

5．出土遺物は，現在県文化課立山分室で保管しているが，本書刊行後は小浜町教育委員会に移管の予定である。

調査関係者

小浜町教育委員会

元村　勉（教育長）
田中正孝（教育次長）
田中敬之（社会教育係長）
岩永政吉
小松　仁

小浜町農林水産課

大石　博（土地改良係長）
吉田優生
吉原久司

長崎県文化課

範囲確認調査

町田利幸（文化財保護主事）
松尾昭子（文化財調査員）

本調査

田川　肇（課長補佐）
高野晋司（埋蔵文化財班係長）
村川逸朗（文化財保護主事）
松尾昭子（文化財調査員）

調査協力者

宮本　勤　（有明ホテル）

吉原ハツエ	寺田　静香	森崎　清太	進藤　豊子	荒木　重道	荒木　春子
寺田ヤチヨ	寺田　千加	寺田　節生	甲斐チトエ	山崎　健吾	宅島　博子
寺田イネ子	寺田　妙	宅島　藤喜	松浦　サキ	山崎　春恵	奥村　美行
遠藤登世子	山崎　澄子	寺田　和弘	金子アツエ	森崎　千恵	寺田八千代
荒木真喜子	田中　悦子	栄木　保男	甲斐　綾子	本多　和子	
宅島フミエ	森崎　スワ	田中　直	中村　安孝	栄木　正孝	
栄木スエ子	栄木　静江	柳井　良秀	吉原　進喜	田中キクエ	

本文目次

Ⅰ　調査に至る経緯……1

Ⅱ　遺跡の立地と環境……1

Ⅲ　調　　査……10

1．範囲確認調査の概要……10

2．土層の状況……10

3．小　　結……11

4．本調査の概要……11

5．土層の概要……11

6．小　　結……11

7．遺　　物……15

(1)　陶磁器……15

(2)　須恵質土器……15

(3)　瓦質土器……18

(4)　土師質土器……18

(5)　土　　器……18

(6)　その他……18

(7)　石　　器……18

8．小　　結……18

Ⅳ　まとめ……20

挿図目次

第1図　遺跡位置及び周辺の遺跡……3～4

第2図　調査区域図……5～6

第3図　試掘壙土層図(1)……7

第4図　試掘壙土層図(2)……8

第5図　試掘壙検出　柱穴　土壙……9

第6図　調査区土層図……12

第7図　本調査区域及び遺構検出状況……13

第8図　A区掘立柱建物跡実測図……14

第9図　出土遺物実測図（陶磁器・土器）……16

第10図　出土遺物実測図（土器・その他）……19
第11図　出土遺物実測図（石器）……19
第12図　県内出土掘立柱建物跡……21～22

表　目　次

第１表　遺跡地名表……2

図版目次

図版１　遺跡全景および範囲確認調査 T.P.B-31土層
図版２　範囲確認調査 T.P.C-21土層および T.P.C-21検出柱穴跡
図版３　Ａ区北東壁土層
図版４　Ａ区南東壁土層
図版５　Ｂ区北東壁土層
図版６　Ａ区西側およびＡ区北側より撮影
図版７　Ａ区南側およびＡ区西側より撮影
図版８　Ａ区掘立柱建物跡東側および南側より撮影
図版９　Ａ区西側より撮影　　Ａ区掘立柱建物跡北側より撮影
図版10　Ｂ区北側および東側より撮影
図版11　Ｂ区柱穴跡
図版12　湾頭遺跡出土遺物（土器・陶磁器）
図版13　湾頭遺跡出土遺物（土器・その他）
図版14　湾頭遺跡出土遺物（石器）

I　調査に至る経緯

小浜町山畑地区において，農道整備・農地区画整理・農地保全（排水路整備）等の農地基盤整備である県営畑地帯総合土地改良事業が小浜町が主体で昭和57年度から実施されているが，それに先立ち当該計画区内の埋蔵文化財についての分布調査を昭和57年３月17日～３月18日に行った結果，周知の遺跡である湾頭遺跡については従来知られているよりも，遺跡の範囲がかなり広く分布していることがわかった。そしてまた新たに大屋敷遺跡を発見することができた。大屋敷遺跡については，すでに範囲確認調査および本調査が行われている。

今回，湾頭遺跡がかかってくる区域も土地改良事業を実施する計画となり，協議の結果，事前に湾頭遺跡の範囲を確認するため，平成５年７月12日～７月27日にかけて試掘調査を実施した。調査の結果に基づき協議を行ったところ，排水路と道路拡張部分については本調査が必要となり，平成６年７月11日～７月27日に実施した。

II　遺跡の立地と環境

湾頭遺跡の所在する小浜町は，島原半島西側中央部に位置し，行政的には南高来郡に属する。東には雲仙普賢岳を擁し，西は千々石湾（橘湾）に面して位置し，対岸に野母半島を眺望できる。地形は丘陵が海に突出していて急傾斜をなして海に没する。平坦地は少ない。

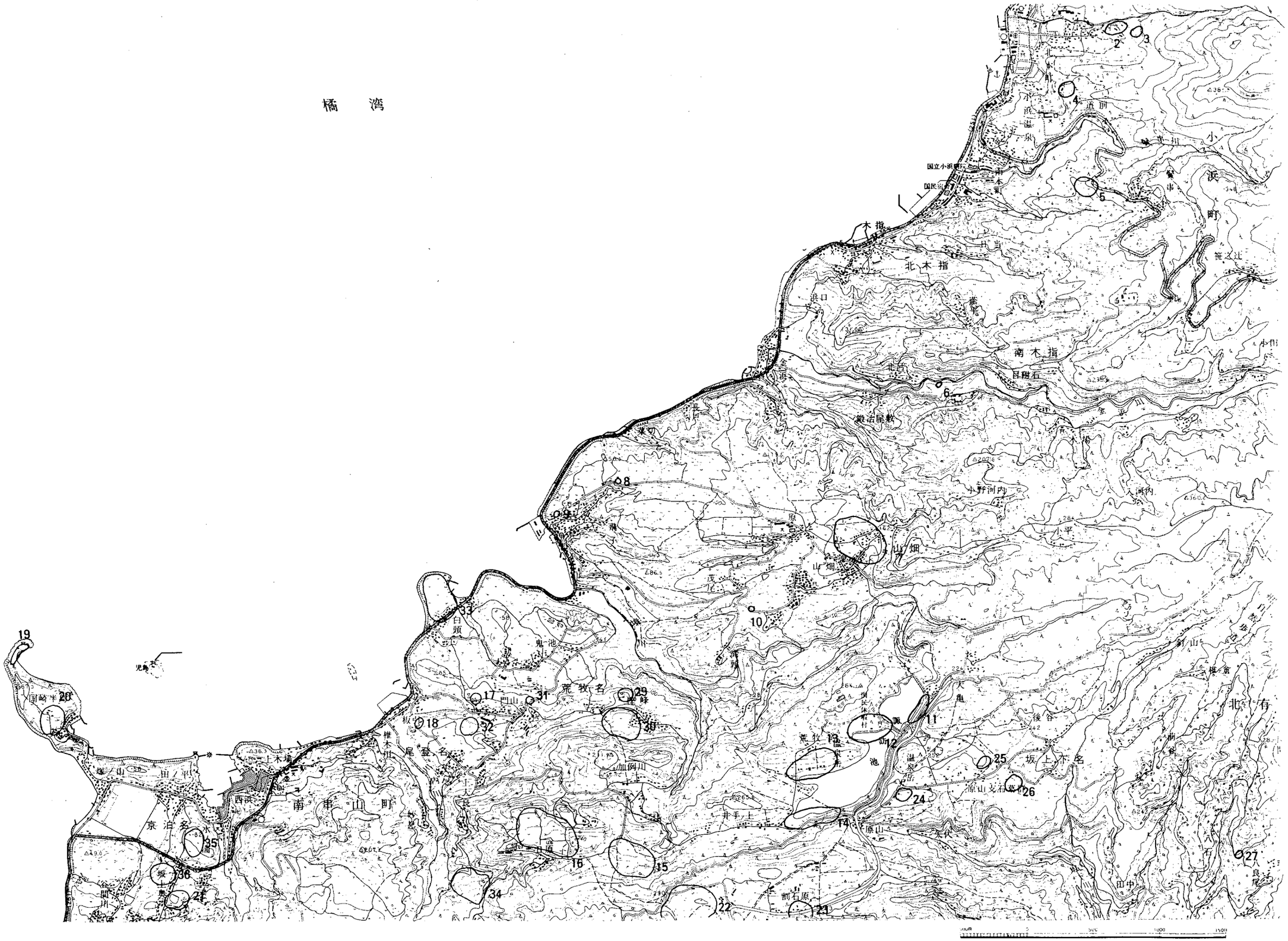
南串山町とは境川が形成する深い谷で接している。湾頭という地名はおそらくこの深い谷の様子からくるようである。

遺跡は島原半島中央部の山地が形成する標高120mほどの緩やかな台地上に位置する。台地を降ると，飛子漁港に出る。現在の飛子港は小さな漁港であるが，戦前までは対岸の網場や茂木，飯盛町の田結などの港に連絡船が定期的に往来していたということである。

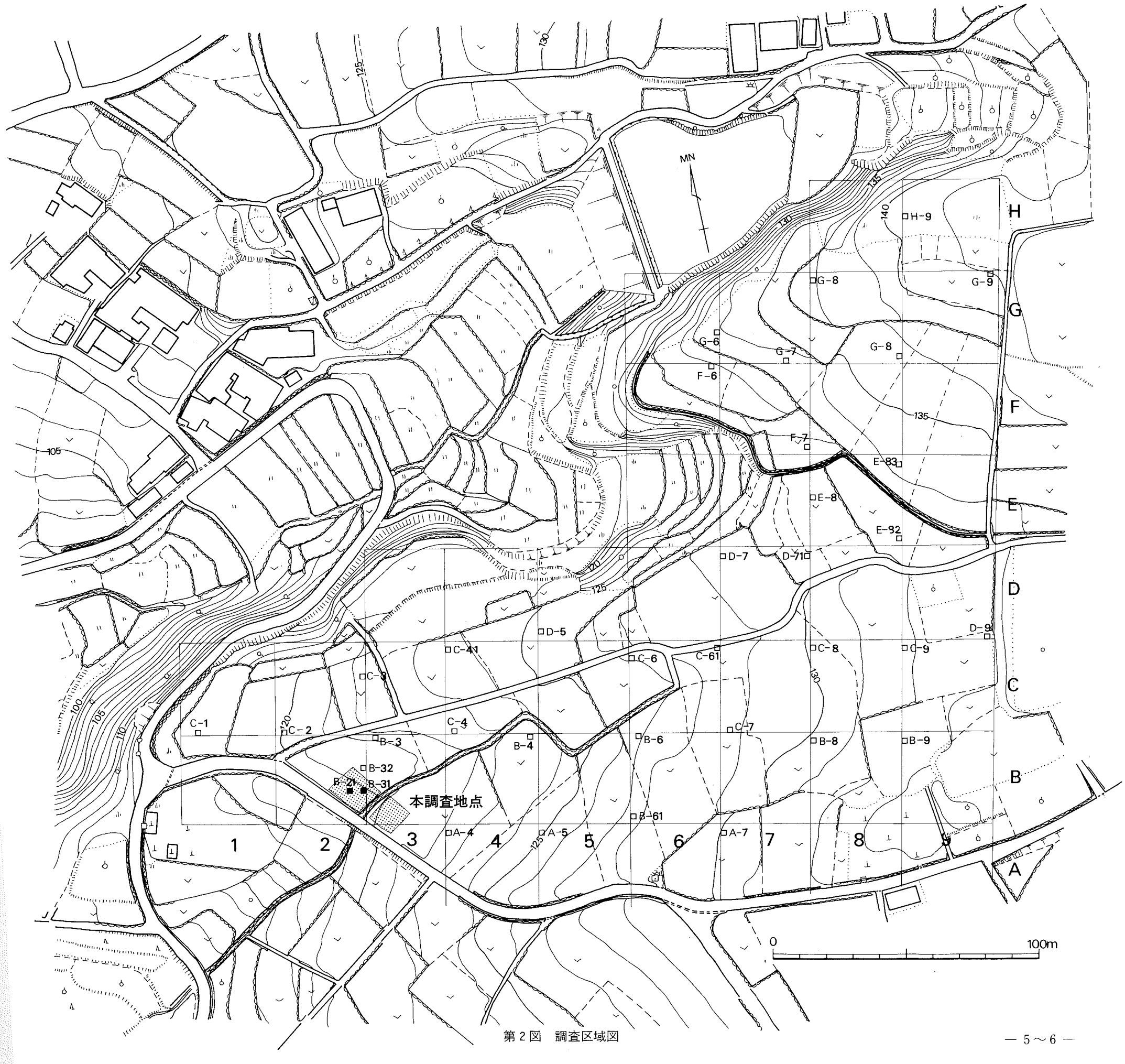
中世の様子を示すものとして，遺跡の東方の墓地に変形の宝篋印塔や，慶安元天（年）〔1648年〕・寛文二年〔1662年〕それぞれの年号の入った板碑があり，遺跡から検出した遺構との関連が予想される。また，湾頭の周囲には小浜城址をはじめ，串山城址，城山城址，峰城址，城ノ越城址など中世の山城が点在している。小浜城は小浜の温泉街から少し山手に入ったところにある。この城は小浜氏累代の居城で，島原半島西口の要衝を占めていた。城主の小浜氏は古代末期に活躍した日向太郎通良の後裔で，多比良・大河藤木・白石氏などと同族である。ルイス・フロイスの『日本史』には「有馬晴信の残せる城は（龍造寺）隆信が高来の領土に侵入すべき道路の二ケ所の一つにて設備も悪く貧弱な城なりき。これより少し離れて串山の城あり」とある。また，元和元年（1615）幕府の一国一城令によって小浜城は取り壊されている。串山城は，有馬氏の家臣の城であり，小浜城の別城であったとある。その他の城跡については詳しいことはよくわかっていない。

小浜町内の代表的な遺跡は，大屋敷遺跡，朝日山遺跡，小浜黒谷遺跡等が挙げられる。

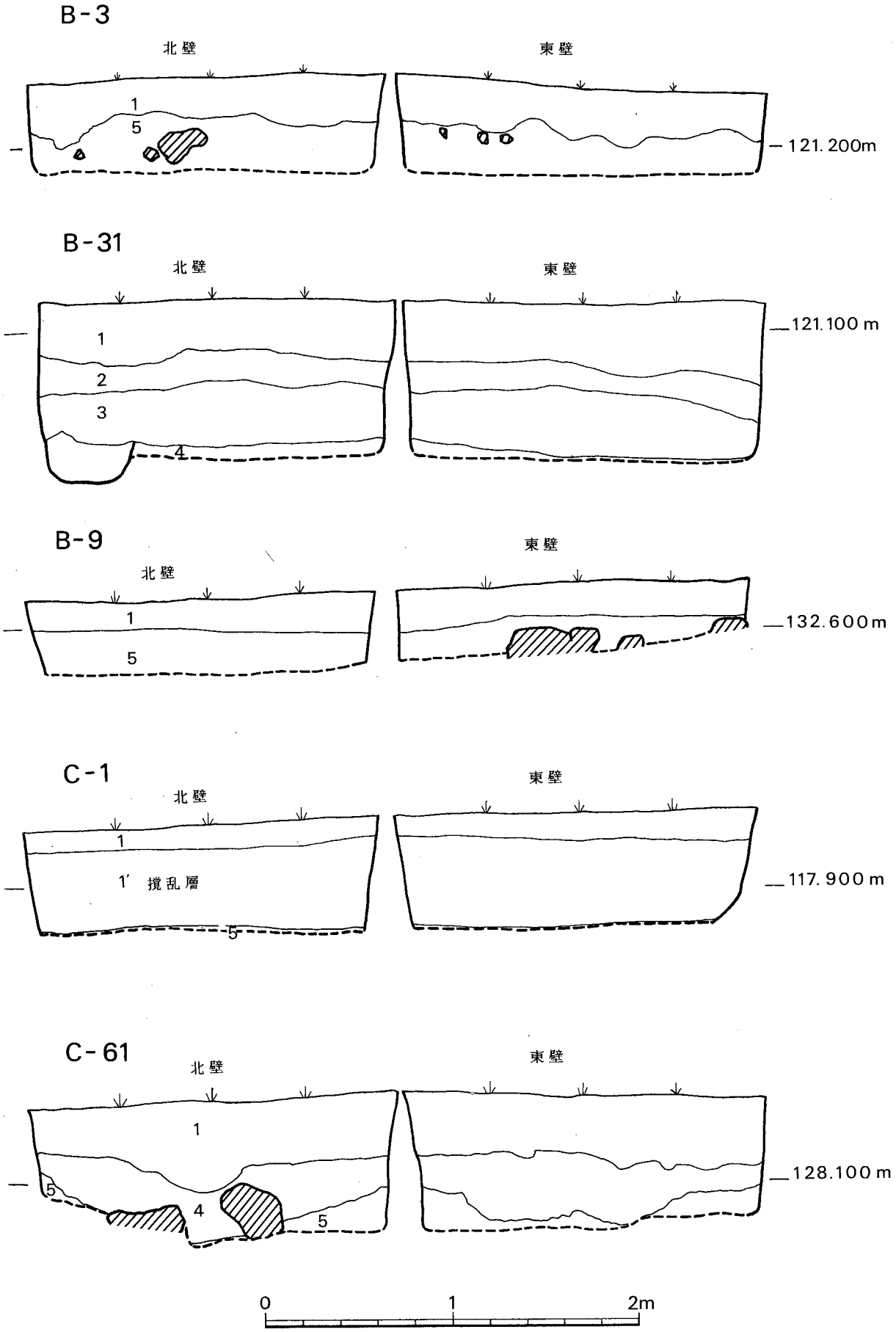
地図No.	名称	所在地	種別	立地	時代	備考
2	朝日山遺跡	小浜町北本町	遺物包含地	丘陵	縄文	
3	小浜黒谷遺跡	〃 〃 朝日山	〃	〃	〃	
4	小浜城跡	〃 南本町名城山	城跡	台地	中世	
5	新切遺跡	〃 新切，柿木平	遺物包含地	丘陵	縄文	
6	小浜町茂無田のキリシタン墓地	〃 木場東中島41	キリシタン墓碑	墓地	近世	県指定
7	大屋敷遺跡	〃 大屋敷，上中谷	遺物包含地	台地	縄文	
8	小浜町土手之元のキリシタン墓碑	〃 飛子字土手之元414	石造物	丘陵	中・近	県指定（4基）
9	小浜町椎山のキリシタン墓碑	〃 〃 名字椎名232	〃	〃	近世	県指定
10	**湾頭遺跡**	**〃 山畑湾頭**	**遺物包含地**	**〃**	**縄文**	
11	諏訪池A遺跡	〃 諏訪野	〃	湖畔	先・縄	
12	〃 B遺跡	〃 〃	〃	〃	〃	
13	〃 C遺跡	〃 〃	〃	丘陵・湖畔	縄文	
14	〃 D遺跡	南串山町荒牧名字諏訪野原	〃	湖畔	〃	
15	加例川遺跡	〃 〃 字名加例川・柳之内・津久良	〃	台地	〃	
16	日原遺跡	〃 尾登名字日原	〃	〃	〃	
17	門山遺跡	〃 荒牧名字門山山下	墳墓	丘陵	弥・古	
18	遠見塚遺跡	〃 尾登名字墓ノ下	〃	〃	古墳	箱形石棺2基
19	国崎遺跡	〃 京泊名字住吉鼻（丙1）	墳墓・遺物包含地	礫丘	縄・古～中	
20	国崎半島遺跡	〃 字国崎・国崎札場・中ノ場	遺物包含地	丘陵	古墳	
21	上ヶ池遺跡	〃 〃 坂上奥	〃	丘陵・溜池周辺	縄文	
22	水溜遺跡	〃 荒牧名，水溜	〃	台地	〃	
23	割石原遺跡	北有馬町折木名字割石原	〃	丘陵	〃	
24	原山第1遺跡	〃 坂上下名字原山	墳墓	台地	〃	支石墓6～7基，石棺20基，甕棺
25	原山支石墓群（第2遺跡）	〃 坂上下名字新田乙2179番	〃	〃	〃	支石墓約30基 } 国指定
26	〃 （第3遺跡）	〃 〃 字原ノ尻河乙2146番～7	〃	〃	〃	支石墓約50基 } 原山支石墓群
27	西正寺のキリシタン墓碑	〃 西正寺名字服田5495番	キリシタン墓碑	丘陵	近世	県指定3基
29	山の神石塔群	南串山町荒牧名字山の神	石造物	丘陵	中・近	
30	峰城跡	〃 〃 字峰五郎	城跡	〃	中世	
31	南串山町のキリシタン墓碑	〃 〃 字門前甲2608の1	キリシタン墓碑		近世	県指定3基
32	尾登禅寺跡	〃 尾登名字北禅寺・南禅寺	寺跡・石造物	丘陵	中世	
33	城山城跡	〃 荒牧名字北城山，南城山他	城跡	〃	〃	
34	串山城跡	〃 尾登名字北曲輪，南曲輪，天守	〃	〃	〃	
35	城ノ越城跡	〃 京泊名字城ノ越	〃	〃	〃	
36	京泊禅寺跡	〃 〃 字上ゲ，他	寺跡	〃	〃	



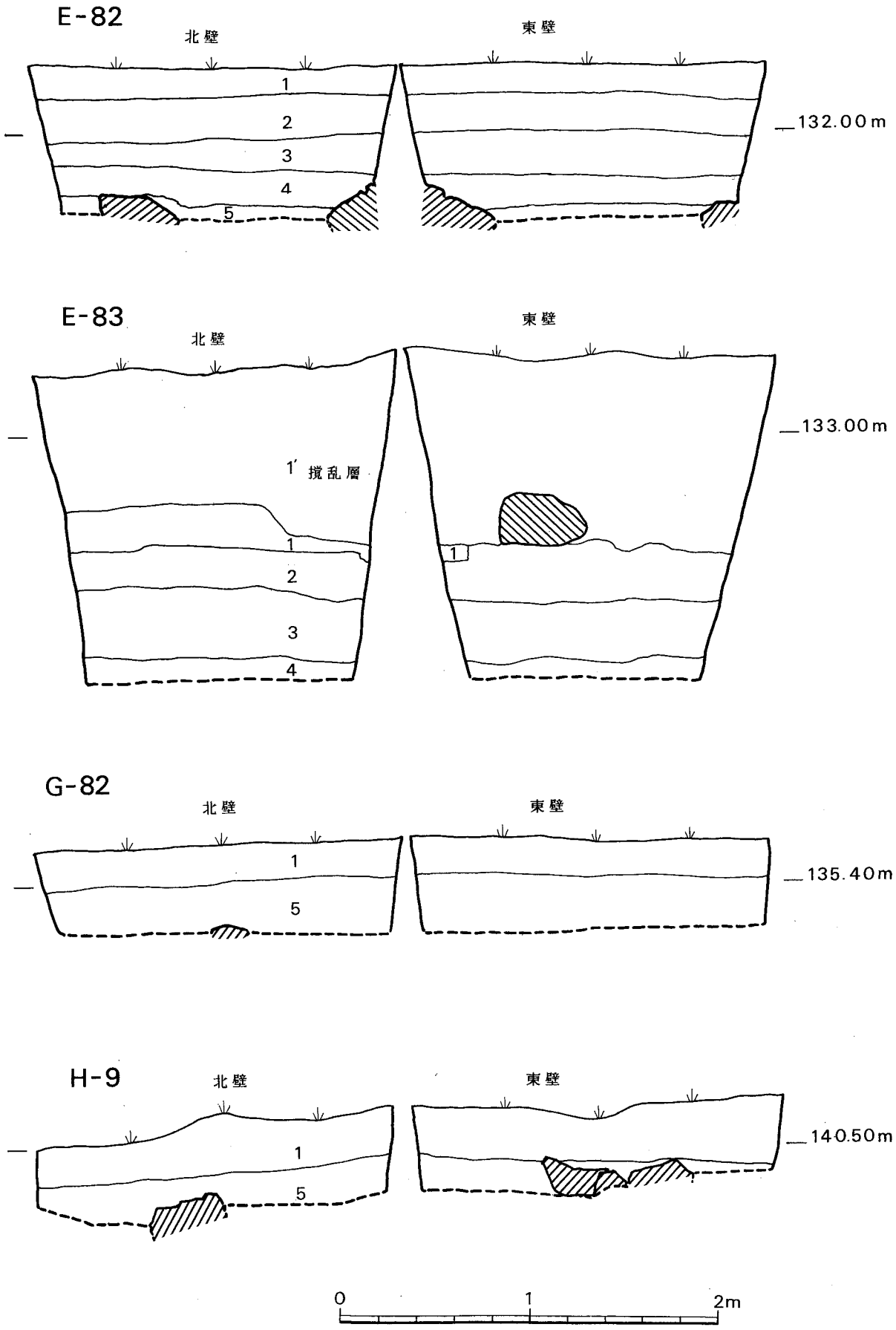
第１図　遺跡位置及び周辺の遺跡


MN
H
G
F
E
D
C
B
A
1
2
3
4
5
6
7
8
9
本調査地点
H-9
G-8
G-9
G-6
G-7
G-8
F-6
F-7
E-83
E-8
E-82
D-7
D-71
D-5
D-9
C-41
C-6
C-61
C-8
C-9
C-3
C-1
C-2
C-4
C-7
B-3
B-4
B-6
B-8
B-9
B-32
B-21
B-31
B-61
A-4
A-5
A-7
0
100m

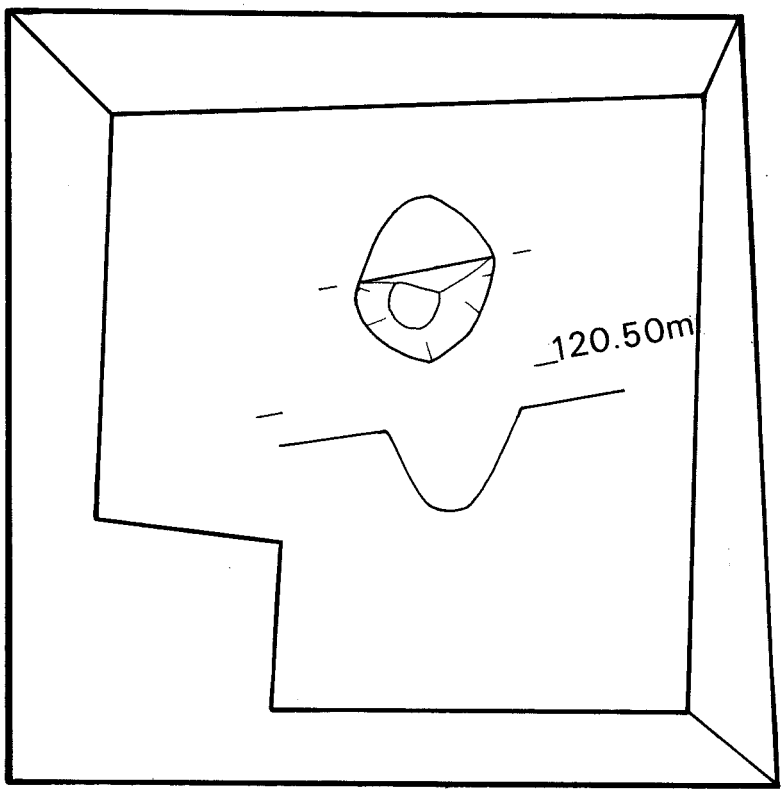
第２図　調査区域図

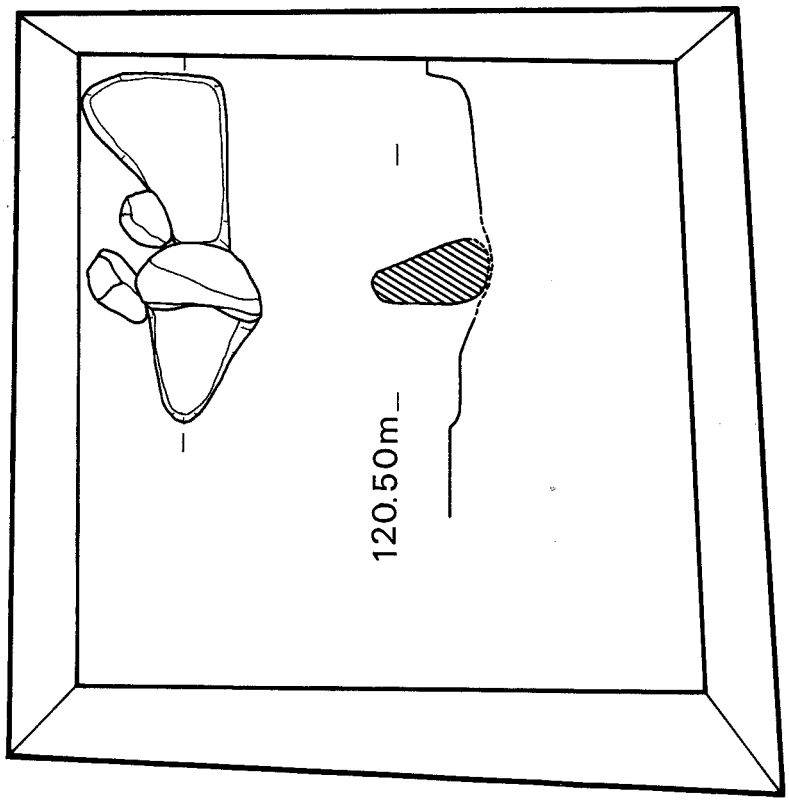

B-3
北壁
東壁
1
5
121.200m
B-31
北壁
東壁
1
2
3
4
121.100 m
B-9
北壁
東壁
1
5
132.600m
C-1
北壁
東壁
1
1′ 撹乱層
5
117.900 m
C-61
北壁
東壁
1
5
4
5
128.100 m
0
1
2m

第3図　試掘壙土層図(I)


E-82
北壁
東壁
1
2
3
4
5
132.00m
E-83
北壁
東壁
1′ 撹乱層
1
2
3
4
1
133.00m
G-82
北壁
東壁
1
5
135.40m
H-9
北壁
東壁
1
5
140.50m
0
1
2m

第4図　試掘壙土層図(2)





第５図　試掘壙検出　柱穴，土壙

大屋敷遺跡は湾頭遺跡の最も近くにあり，山畑地区畑総事業に伴って昭和58年に分布調査および範囲確認調査を，61年には本調査を県文化課で行っている。遺物は，土器では縄文晩期の刻目突帯文土器，組織痕土器等が出土し，石器では縄文時代の石鏃，スクレイパー，石斧，磨石，凹石等が出土している。弥生時代では後期の複合口縁壺，三角突帯貼付けを有する土器等が出土している。また，古墳時代の土師器，鏡片の出土もみている。さらに中世・近世の遺物も国産の瓦質，須恵質土器，輸入陶磁器の青磁，白磁，青白磁，青花，華南彩釉陶など，また滑石製石鍋，古銭，鉄滓等が出土している。遺構はドーナツ状遺構，柱穴群を検出している。

朝日山遺跡は，小浜町営の朝日山団地造成の折に県文化課が発掘調査を行っている。遺構は炉跡1基，集石遺構2基を検出している。遺物では縄文時代晩期の黒色研磨土器，リボン状突起を有する粗製土器，刻目突帯文土器，籠目状圧痕・網目痕等の組織痕文土器が出土している。また，石器は，打製・磨製石斧等が出土している。

小浜黒谷遺跡は，昭和36年『日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会』によって行われた学術調査で，柱穴，炉跡を検出しており，住居跡であると考えられている。すぐ近くの朝日山遺跡と同時期の土器・石器が出土している。

また湾頭遺跡は現在，馬鈴薯栽培を中心とした畑作地帯となっている。

III 調　　査

1．範囲確認調査の概要

湾頭遺跡の範囲確認調査は，小浜町教育委員会が主体となって，県文化課が調査を担当し，平成5年7月12日～7月27日まで実施した。

調査対象面積の75,000m²に35m方眼を基本として，2m×2mの試掘壙を36カ所調査し，さらに2カ所の試掘壙を追加して合計38カ所（152m²）を調査した。

遺物は工事区全体に縄文時代の黒曜石剝片等が散布している。

調査の結果，旧石器～近世に至る遺物のほとんどが表採によって得られており，遺物包含層については確認できなっかった。

遺構は，T.P.C-21から4層を掘り込んだ中世の掘立柱建物の柱穴跡を検出し，T.P.B-31からも4層を掘り込んだ土壙を検出した。いずれも遺構内の覆土からは，焼土・炭が認められた。

2．土 層 の 状 況

土層は基本的に5層に分かれており，1層…耕作土，2層…茶褐色土層，3層…黒褐色土層，4層…明茶褐色土層，5層…明黄褐色風化礫層（地山）が堆積している。しかし，この層位を確認できたのは，T.P.E-83，T.P.C-8，T.P.B-8であった。これ以外の試掘壙については機械による土地改良のためほとんどが撹乱又は削平を受けた状況であった。

3．小　　結

以上の範囲確認調査の結果に基づいて，柱穴等が確認され，中世の建物跡が存在することが予想される部分は道路・排水溝を設置する部分と重なっているため，設計変更できない場合には発掘調査による記録保存を行う必要があること，また，工事中に遺物・遺構等の発見があった場合には速やかに連絡し協議することを，関係機関へ通知した。

4．本調査の概要

平成５年度の範囲確認調査の結果から，遺跡の現存している範囲が小さく限定されることがわかった。しかし遺構が発見された部分は，排水溝工事と道路拡幅工事によりほとんど破壊されるため，協議の結果，平成６年７月11日～８月５日まで本調査を実施した。

調査は，水路を挟んで西側をＡ区，東側をＢ区とし，５ｍ毎に区切り西から東へＡ～Ｇ，南から北へ０～３としてグリッド設定を行い調査した。調査面積は274m²である。

遺構は，掘立柱建物跡を２棟検出した。１棟はＡ区南側に，前年度試掘調査のときに検出した柱穴をもとに，一部町道に削られた形で検出。もう１棟はＢ区北側に一部検出している。このＢ区の建物跡については，北側に続く畑地に拡がるものと考えられる。工事にあたっては遺構面の保護のため，現地表面より計画高が下がらないように各関係機関にお願いした。

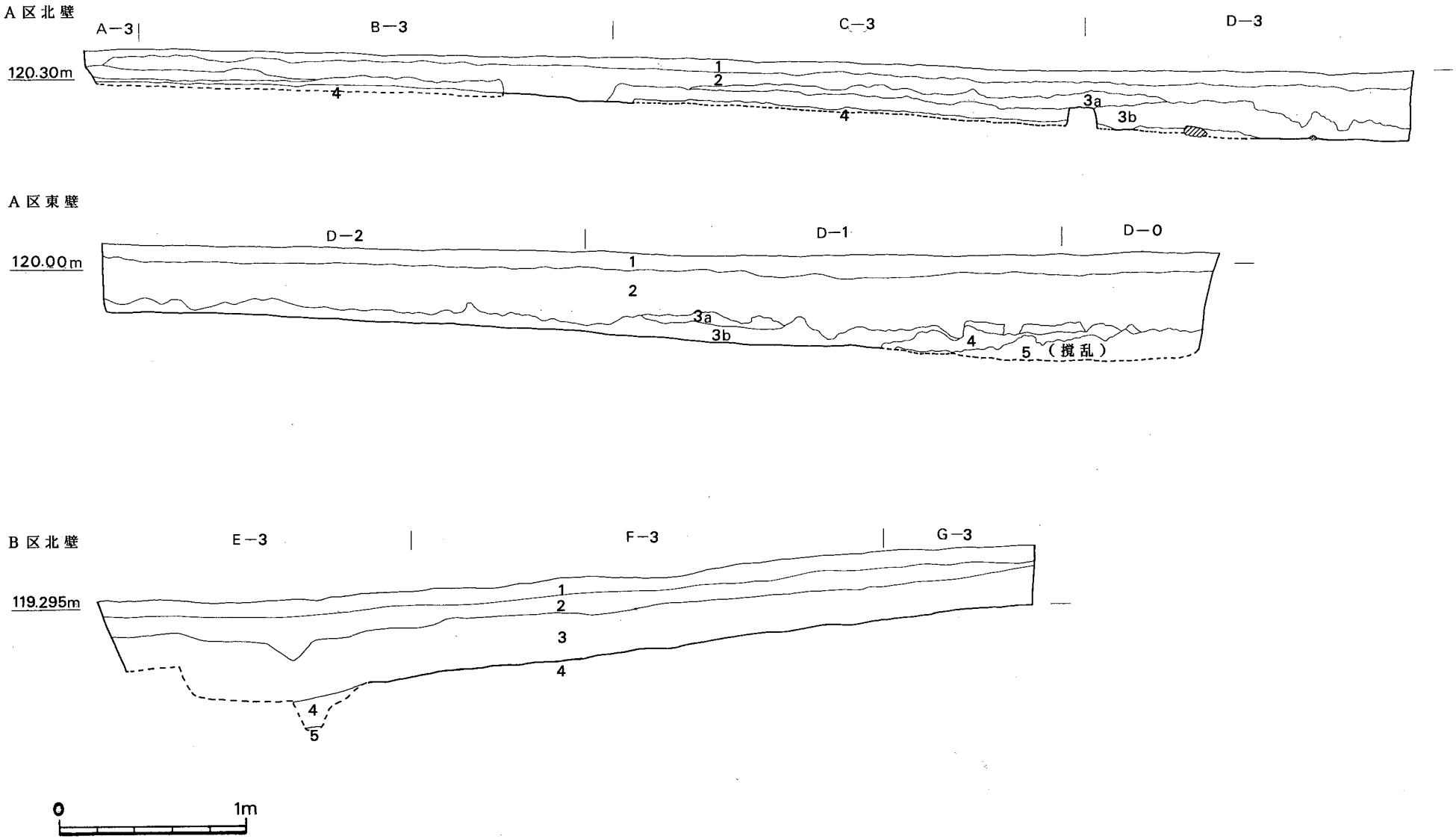
5．土層の状況

土層は，１層…耕作土，２層…茶褐色土層，３層…茶褐色粘質土層，3b 層…暗茶褐色粘質土層，４層…明茶褐色粘質土層，５層…明黄褐色土層が堆積している。しかし，Ａ区東壁５層部は，土地改良のため撹乱および削平を受けているところに遺物を含んだ畑地の土砂が流れ込んでいるため，この限りではない。また，Ｂ区においては３層部分がはっきりと２つに分けられなかったために一括して３層と表示している。

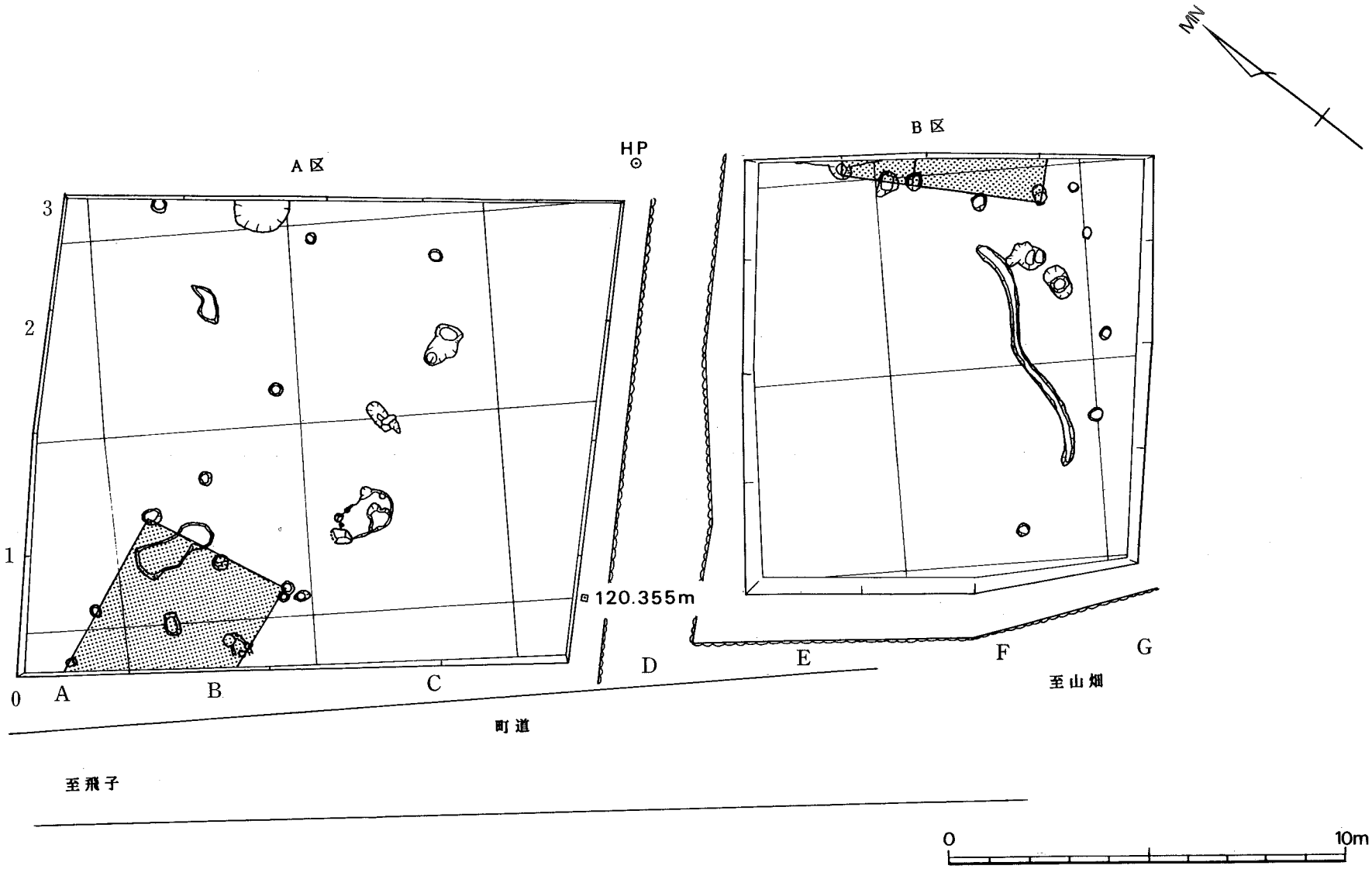
6．小　　結

本調査では，旧石器・縄文～中世の遺物が出土しているが遺構として確認できたのは，中世および近世の建物跡であった。

また，遺跡の立地する畑地が緩やかな傾斜をなしているため，上方畑地の土が降水によって下方畑地に押し流され溜ったために，下方部分だけに辛うじて遺構が残ったことがわかった。

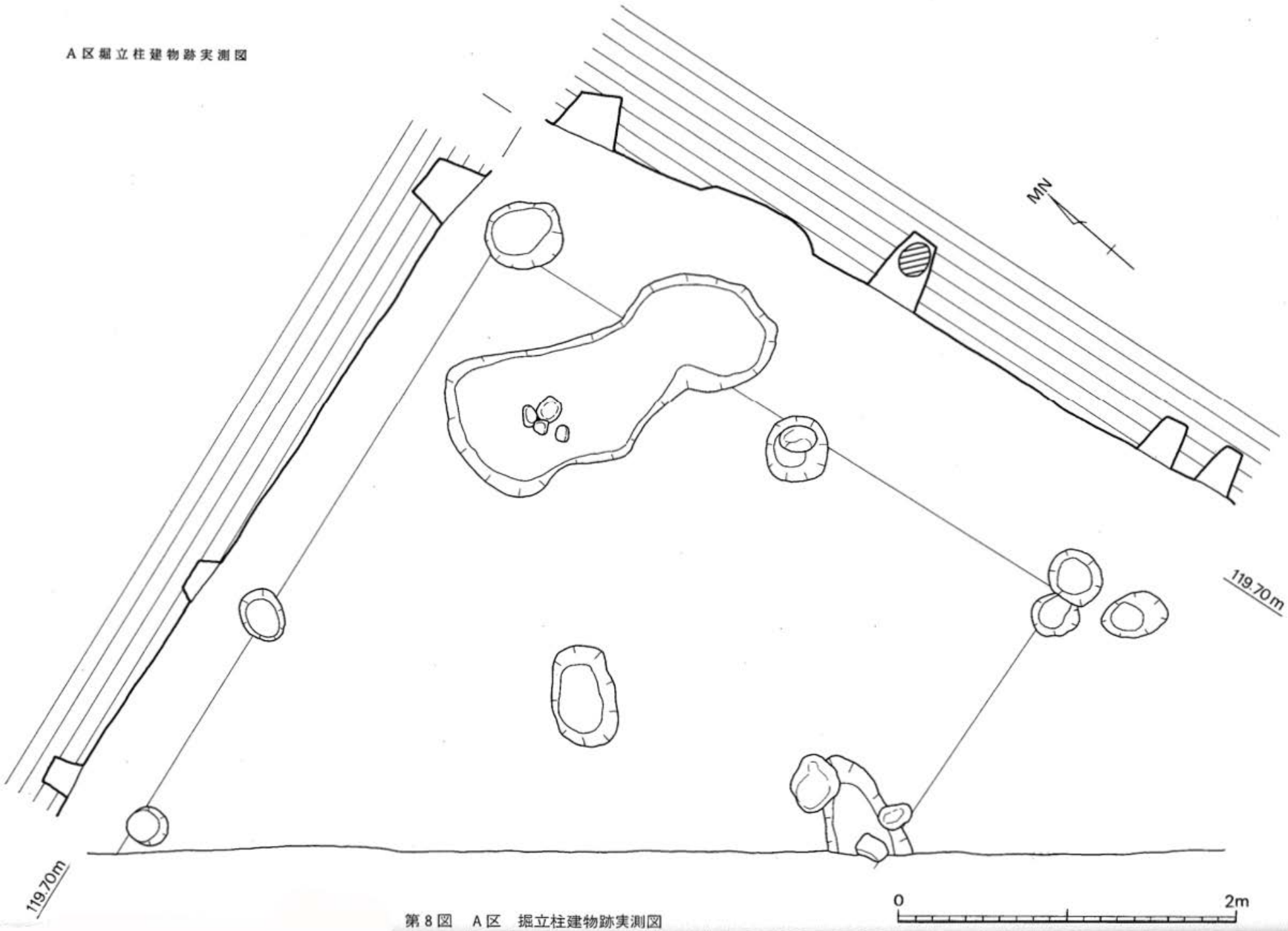

A区北壁
A−3
B−3
C−3
D−3
120.30m
1
2
3a
3b
4
A区東壁
D−2
D−1
D−0
120.00m
1
2
3a
3b
4
5（撹乱）
B区北壁
E−3
F−3
G−3
119.295m
1
2
3
4
5
0
1m

第6図　調査区土層図



第７図　本調査区域及び遺構検出状況（アミ目部分は掘立柱建物跡）

A区掘立柱建物跡実測図



第8図　A区　掘立柱建物跡実測図

《参考文献》

1．小浜町教育委員会「朝日山遺跡」小浜町文化財調査報告書第１集　1981

2．長崎県教育委員会「大屋敷遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅻ　長崎県文化財調査　報告書第94集　1989

3．長崎県教育委員会「今福遺跡　Ⅰ」長崎県文化財調査報告書第68集　1984

4．長崎県教育委員会「今福遺跡　Ⅱ」長崎県文化財調査報告書第77集　1985

5．長崎県教育委員会「今福遺跡　Ⅲ」長崎県文化財調査報告書第84集　1986

6．『角川日本地名大辞典 42 長崎県』角川書店　1987

7．遺　　物

本遺跡より出土した遺物は範囲確認調査と本調査分を併せて約500点出土している。

旧石器・縄文・弥生～中世・近世等各時代の遺物が出土しているが，風化が激しく摩滅しているものもあるので，図化しやすいもののみを取り上げている。また陶磁器は小片のため，器形がわかりにくく時期判定ができないものが多い。

(1) 陶　磁　器

１は龍泉窯系の鎬蓮弁を持つ青磁碗の口縁部破片である。T.P.E-82の２層より出土。２も同じく龍泉窯系の内面に蓮華文を持つ青磁碗の口縁部破片である。T.P.D-71の３層より出土。

３～13は明の染付（青花）であるが小破片のため不明な点が多い。３は青花碗の腰部の破片である。T.P.B-31の３層より出土。４はA区 C-1～２の３層より出土。５は青花碗底部の破片である。B区 G-2の３層より出土。６はT.P.B-31の３層より出土。７はA区 D-2の３層より出土。８はA区 D-2の２層より出土。９は腰部破片でA区 C-0の２層より出土。10は口縁部である。染付の発色が藍色に近く，貫入がある。A区 C-0の２層より出土。11は青花皿の胴部破片である。A区 C-1の２層より出土。12は口縁部破片で口唇部が反っている。A区 D-1の２層より出土。13は青花碗腰部破片である。B区 F-1の２層より出土。

14は白磁の口縁部破片である。T.P.C-21の２層より出土している。

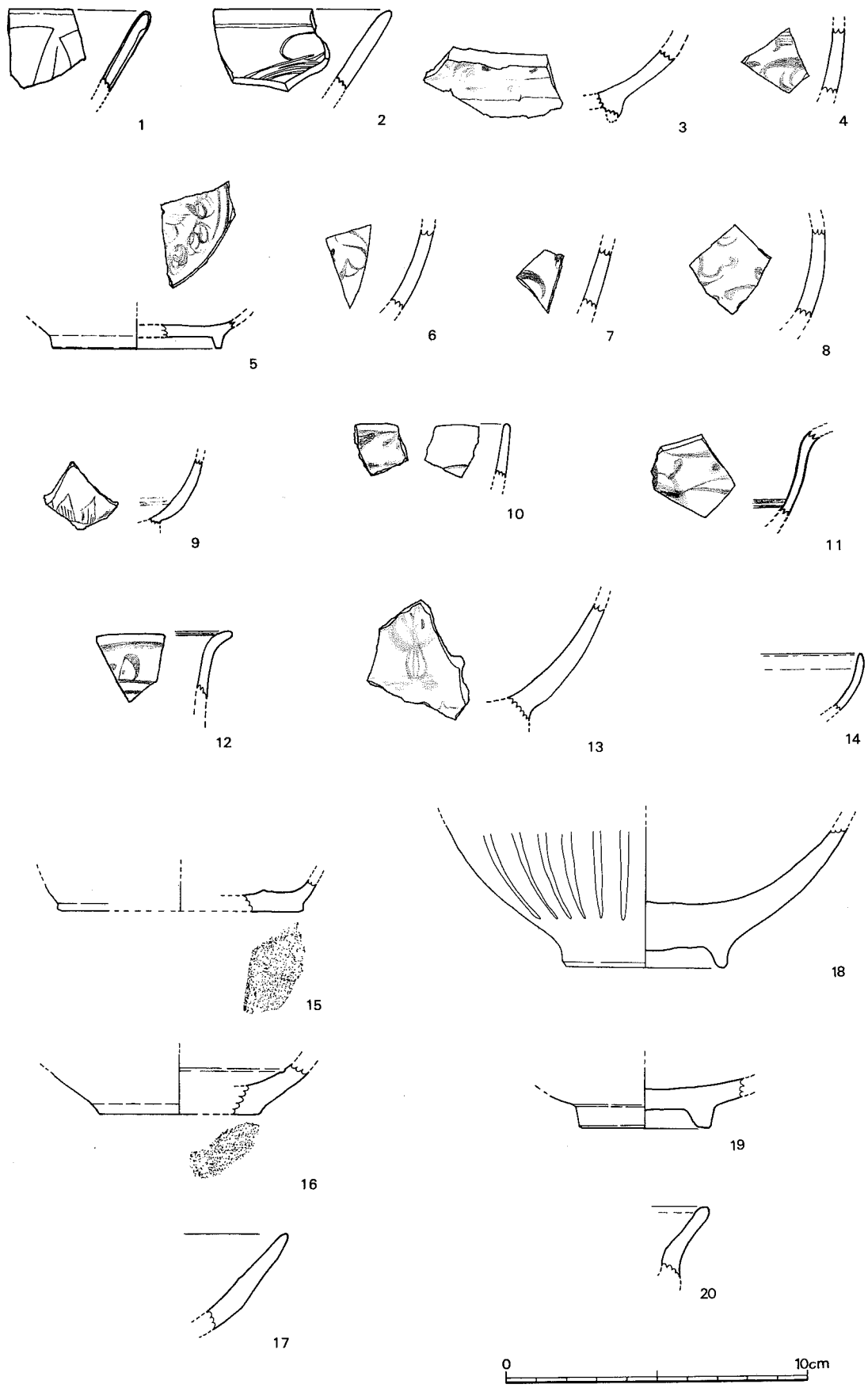
18は龍泉窯系の鎬蓮弁を持つ灰緑色の青磁碗で釉が厚く鎬蓮弁が細いのが特徴である。A区 C-2の２層より底部が出土しており，B区 F-1の２層より胴部が出土している。

19は青磁の底部。器種は不明。釉が底部まで施されておらず，内部見込み部分は蛇の目剝ぎになっている。A区 D-0の４～５層より出土。

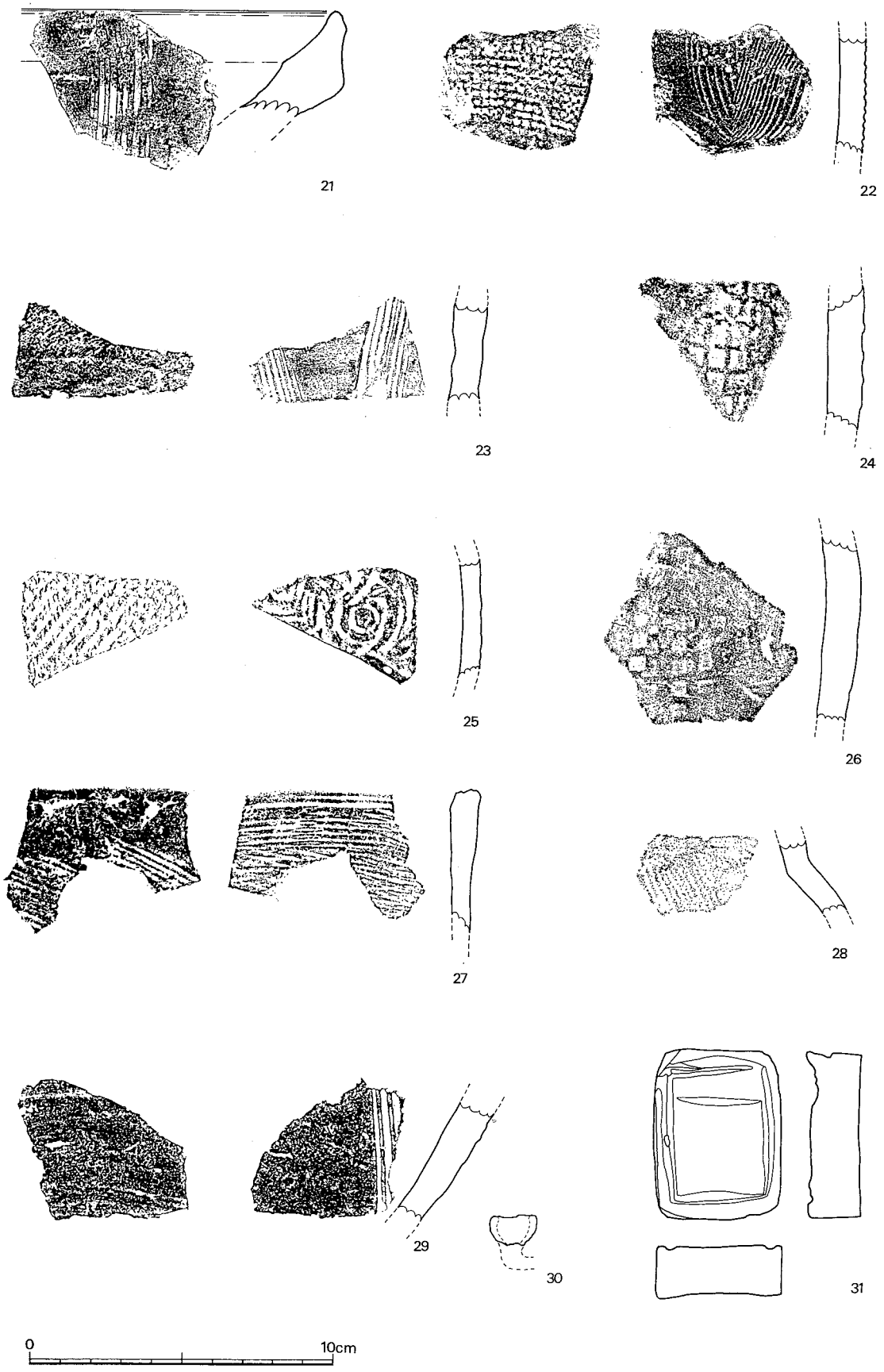
20は片口の注口部分の破片で赤褐色の胎土に象牙色の釉が施されている。B区 F-1の２層より出土している。

(2) 須恵質土器

23は須恵質の擂鉢。破片であるため，形式等は不明である。A区 C-1の３層より出土。25は須恵器甕の破片で表裏共に叩き目が残る。B区 E-1の３層より出土。29は須恵質の擂鉢破片。T.P.C-21の２層より出土。



第９図　出土遺物実測図（陶磁器・土器）（½）



第10図　出土遺物実測図（土器・その他）（½）

(3) 瓦質土器

21は瓦質の擂鉢の口縁部破片。A区 D-2の3層より出土。22はこね鉢の破片。表に網目の文様が残る。A区 C-0の3層より出土。24は格子目の文様を残す平瓦の破片である。焼成はあまりよくない。B区 F-1の3層より出土。26も格子目文様の平瓦で，焼成はあまりよくない。B区 F-1の3層より出土。27は表裏共に刷毛目の残る，手づくねの瓦質土器である。A区 C-1の2層より出土。

(4) 土師質土器

15は土師皿底部の破片。糸切り底で，色調は淡黄褐色を呈し，一部赤みがかっている。A区 D-0の3層壁面より出土。16は土師皿底部破片で淡黄橙褐色を呈している。糸切り底。B区 F-1の3層より出土。17は土師皿口縁部破片で暗褐色を呈する。A区 B-3の3層より出土。

(5) 土　　器

28は弥生の壺頸部で，刷毛目文が施されているが裏面は摩滅していて文様等はわからない。色調は表面が灰褐色，裏面が淡褐色を呈する。B区 F-1の2層より出土。

(6) そ の 他

30はキセルの雁首の先の火皿の部分。B区 F-1の3層より出土。

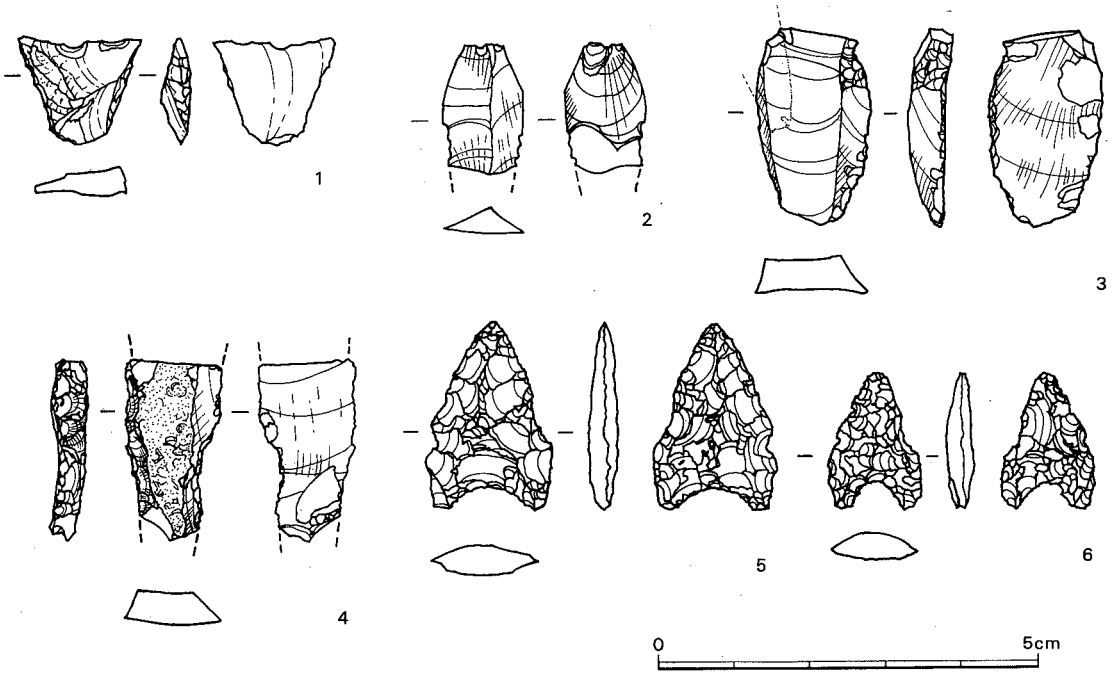
31は未製品であるが瓦を硯に転用した例である。縦5.6cm，横4.1cm，高さが1.8cmと小さいものなので，実際に使用する目的で加工したのかは不明である。T.P.G-9の4～5層より出土。

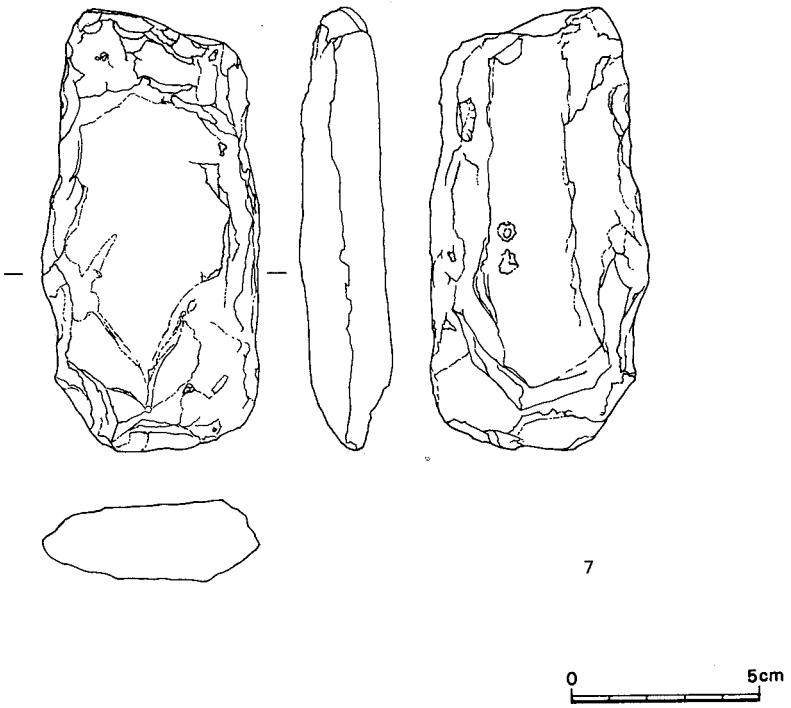
(7) 石　　器

1は碧玉（ジャスパー）製の台形石器で，背面の両側縁は腹面側からの細かいブランティングが施されていて，刃縁には刃こぼれ状の微細剥離をとどめている。素材が碧玉であるのが興味深い。百花台型台形石器。A区 B-3の4層直上より出土。2は黒曜石製の剥片で，先端部が欠損している。T.P.E-82の2層より出土。3は黒曜石製の使用痕のある剥片で，右上辺部分から先端部分にかけて使用痕がみられる。B区 F-2の2層より出土。4は縦長剥片を使用したナイフ形石器で，先端部分を欠損している。右下辺部および下端部が新しい傷により欠損しているため詳しいことは判らないが，左辺部に丁寧なブランティングが施されている。特徴としては表面に自然面を残していることが挙げられる。T.P.C-9より表面採集。5は黒曜石製の凹基式の石鏃で反りが浅い。不純物が含まれているために器形が変形している。また，両脚がわずかに欠損している。B区 F-2の2層より出土。6は黒曜石製の凹域坂の石鏃で比較的抉りが深い。全体的に作りが雑である。A区 C-1の3層より出土。7は玄武岩製の短冊型打製石斧。表面の風化が進んでおり，表面に重機による傷が入っている。範囲確認調査時に表面採集。

8．小　　結

遺物の年代をみてみると，中国産輸入陶磁器の1の龍泉窯系の鎬蓮弁をもつ青磁碗は，太宰府分類によると13世紀中頃～後半にかけてのものである。2の龍泉窯系の内面に蓮華文を持つ青磁碗は，12世紀中葉～13世紀初頭にかけてのものであろう。





第11図　出土遺物実測図（石器）（1/1，1/2）

3～13の青花は小破片であるが，器種および年代については，宮崎貴夫氏により明染付のC～D類の範疇に入るとのご教示を得られた。

14の白磁の小皿は11世紀中葉～12世紀初頭にかけてのものであろう。18の龍泉窯系の鎬蓮弁を持つ青磁碗は，13世紀後半～14世紀中葉にかけてのものであろう。

近世陶磁器では19の唐津系の青磁と20の片口の注口部分がみられる。

須恵質の甕・擂鉢，瓦質の擂鉢・こね鉢等は中世のものであろう。

また，キセルについても，タバコは近世初頭頃に海外から持ち込まれたものであるので，年代はそれ以降になる。

そのほかは小破片が多いため詳しいことはよく判らない。

Ⅳ まとめ

本来ならば，少量ではあるがバラエティーに富んだ遺物の出土状況から，各時代にそれぞれの人々が生活していたはずである。しかしその事を証明する遺構は，範囲確認調査時に検出した炉跡1基と中世または近世の掘立柱建物跡が部分的に残るのみであった。

ここでは，中世～近世と思われる掘立柱建物跡について見てみたい。A区南側検出の建物跡とB区北側検出の建物跡では，時期差があると考えられるが，撹乱により明確な遺物包含層もなく，決定的遺物にも恵まれていない。そこで県内検出のいくつかの掘立柱建物を例に挙げて，参考としたい。

長崎県内調査の近世の掘立柱建物跡

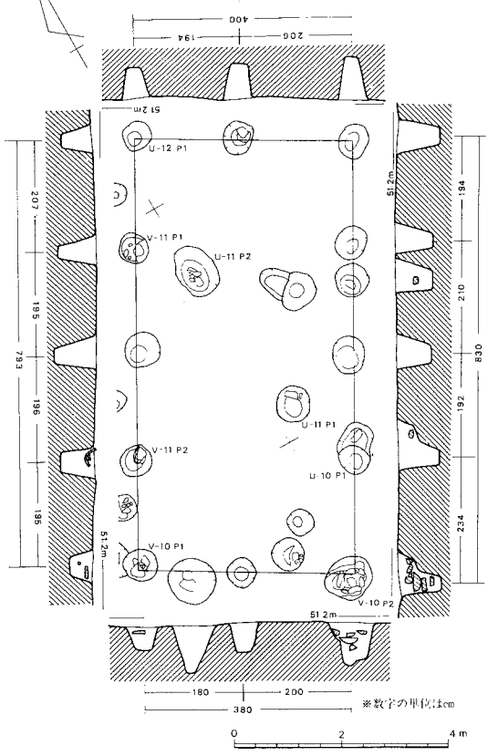
・諫早市	岩下遺跡	18世紀前半
・大村市	嶽の下A遺跡	17世紀終末～18世紀
・大村市	稗田遺跡	中世～近世
・東彼杵町	野中遺跡	17世紀前半
・東彼杵町	小薗城跡	17世紀後半～18世紀

・堀立柱建物から礎石建ての建物への移り変わり

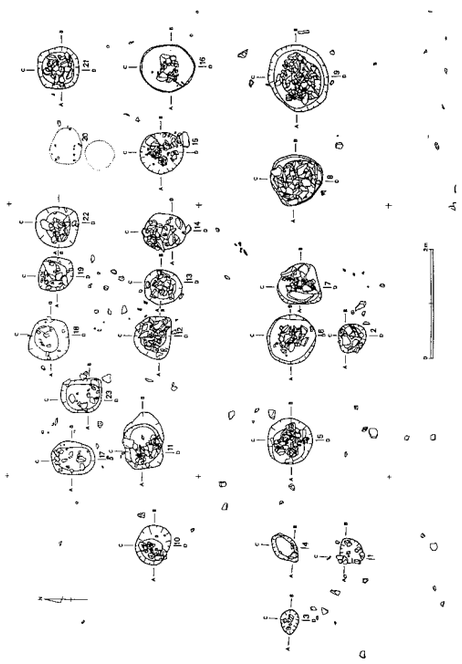
同じ堀立柱建物跡であっても単純な立ち上がりのものと軒先があるものとでは，経済的な条件などもあると思うが，軒先のあるものが新しいと思われる。上に挙げた堀立て柱建物跡の例は，このことを証明している。

18世紀後半になると，長崎市中里町所在の国指定重要文化財の本田家住宅〔明和年間（1764～72）建造〕のように礎石建てに移行してくる。一般的ないわゆる民家としての礎石建ての建物の普及は，畿内を中心とする地域がもっとも早く，少なくとも17世紀中頃までには成立し，そのほかの地域では17世紀後半以降に段々と普及している。九州においてはこれよりもやや遅れて17世紀末～18世紀初頭

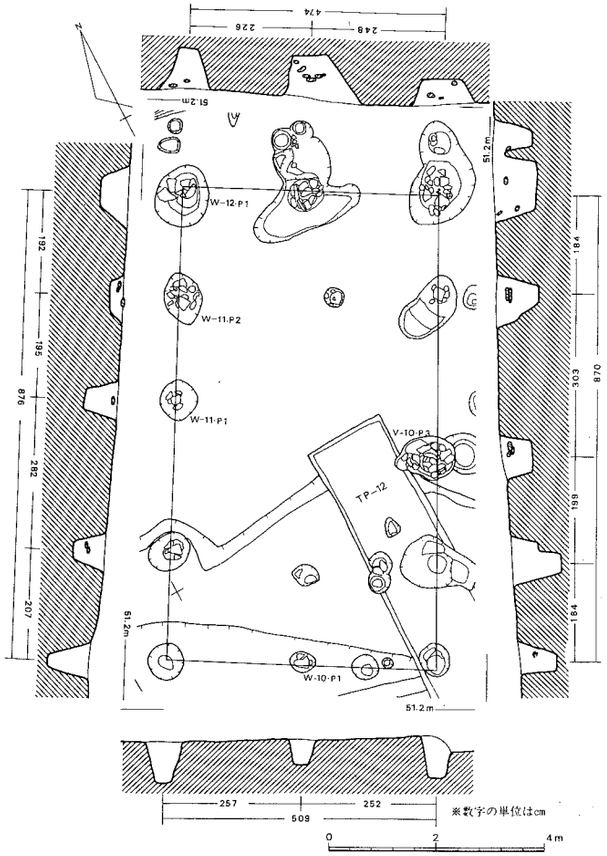
野中遺跡（17世紀前半）

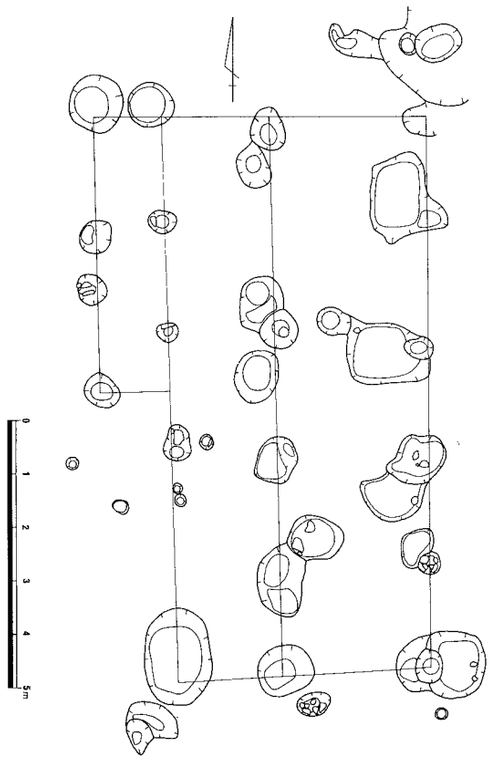


岩下遺跡（18世紀前半）

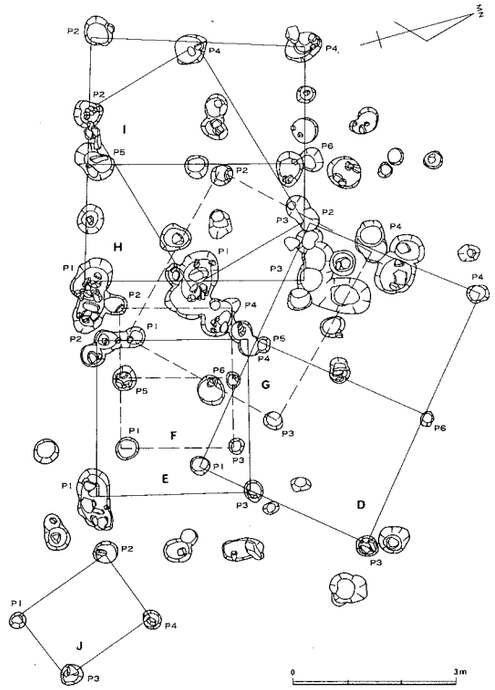


小薗城跡（17世紀後半～18世紀？）

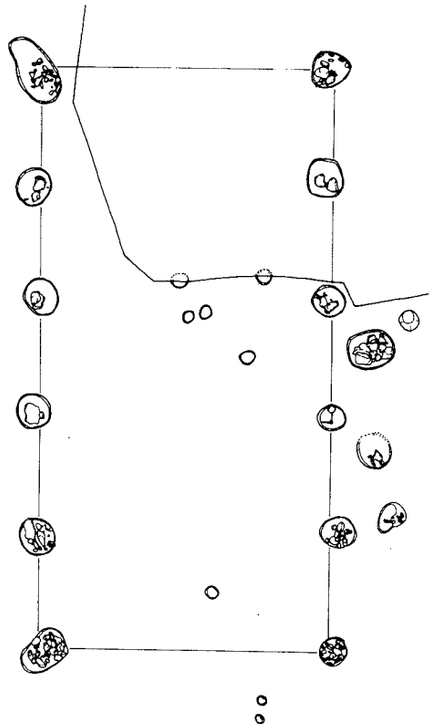


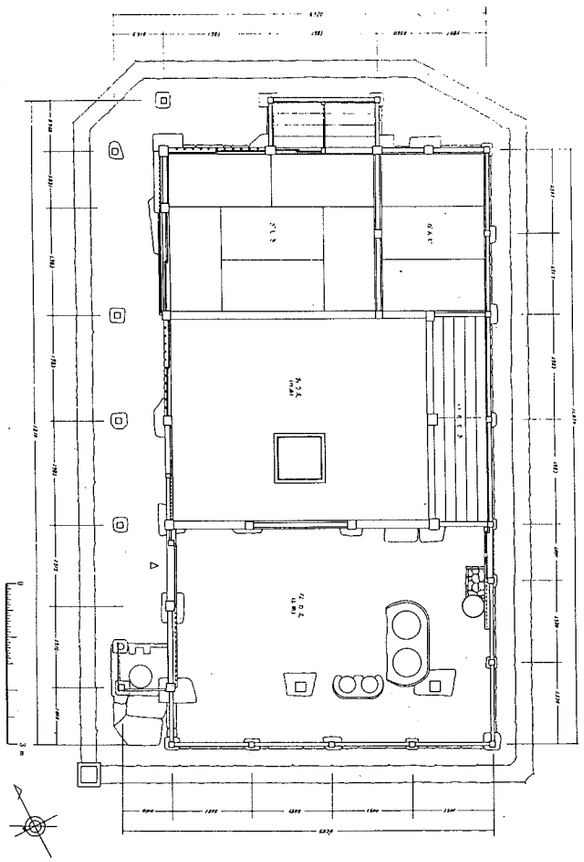


嶽の下遺跡（17世紀終末～18世紀）



稗田遺跡





※本田家住宅〔明和年間（1764～72）〕
（礎石建て建物）

第12図　県内出土掘立柱建物及び礎石建て建物（同一縮尺）

にかけてか，またはそれ以降になる。

では，本遺跡から検出された遺構にはどのような意味付けができるのか。これは遺構を部分的にしか検出できなっかったために答えを見いだすことは難しい。あえて述べるならばA区建物とB区建物では，A区建物の柱穴は単純に並んでいるがB区建物では部屋を区切ったり継ぎ足したりするための柱があり，軒先を支える柱穴らしきものがあると思われる。推測の域を出ないが，このことからA区建物よりB区建物のほうが新しいといえないだろうか。

前述の「遺跡の立地と環境」に少々補足をしておきたい。湾頭遺跡の周辺には中世～近世にかけての文物が多く残っており，本遺跡との何らかの関連が予想される。

本遺跡東方の墓地に変形の宝篋印塔のほか，慶安元天（年）（1648）・寛文二年（1662）それぞれの銘のある板碑がある。地元の人の話しによると，この墓地は最近になって大部分が遺跡下の墓地に移されており，比較的古い墓が残されているようである。そのなかでも古いものが上記の３つである。

この墓地の東側のすぐのところに松藤家本家跡がある。松藤家は小浜町でも屈指の旧家である。松藤家の祖は島原の乱（寛永14年（1637））の後，寛永19年（1642）の幕府からの移住命令により，瀬戸内海の小豆島から移住してきている。はじめは，現在の南串山町荒牧名に居住していたが，松藤家の祖（七郎衛門重熙）は，承応元年（1652）に串山村が南串山村と北串山村に分割された３年後の明暦元年（1655）城主の命により，北串山村の庄屋として山畑の地に移されている。

《参考文献》

1．小浜町教育委員会『朝日山遺跡』小浜町文化課調査報告書第１集　1981

2．長崎県教育委員会『大屋敷遺跡』長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅻ　長崎県文化財調査　報告書第94集　1989

3．長崎県教育委員会『今福遺跡　Ⅰ』長崎県文化課調査報告書第68集　1984

4．長崎県教育委員会『今福遺跡　Ⅱ』長崎県文化課調査報告書第77集　1985

5．長崎県教育委員会『今福遺跡　Ⅲ』長崎県文化課調査報告書第84集　1986

6．森田　勉・横田賢次郎「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』九州歴史資料館　1978

7．小野正敏「15～16世紀の染付碗，Ⅲの分類と年代」『貿易陶磁研究 No. 2』日本貿易陶磁研究会　1982

8．長崎県教育委員会，松浦市教育委員会『楼楷田遺跡―松浦火力発電所建設に伴う埋蔵文化財調査報告書―』長崎県文化財調査報告書第76集　1985

9．田川　肇，福田一志，村川逸朗「岩下遺跡」『九州横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅳ』長崎県文化財調査報告書第69集　長崎県教育委員会　1984

10．藤田和裕，村川逸朗，草野誠司「嶽ノ下Ａ遺跡」『九州横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅴ』長崎県文化財調査報告書第72集　長崎県教育委員会　1985

11．長崎県大村市稗田遺跡調査会『稗田遺跡―弥勒寺地区農業構造改善事業にかかる遺跡の発掘調査報告書―』1988

12. 副島和明，宮崎貴夫，町田利幸「野中墓地・野中遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書VI』長崎県文化財調査報告書第93集　長崎県教育委員会　1989
13. 正林　護，町田利幸，村川逸朗，小野ゆかり「小薗城跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書VIII』長崎県文化財調査報告書第99集　長崎県教育委員会　1991
14. 長崎県教育委員会『長崎県建造物復元記録図書報告書（民家等）』1989
15. 小浜町「小浜町史談」小浜町史談編纂委員会　1978
16. 南串山町「みなみくしやま」南串山町郷土誌　1985
17. 『角川日本地名大辞典 42 長崎県』角川書店　1987
18. 宮澤智士『日本列島民家史』技術の発達と地方色の成立　住まいの図書館出版局

図　　版

遺　跡　全　景

範囲確認調査　T.P.B-31　土層

図版 2

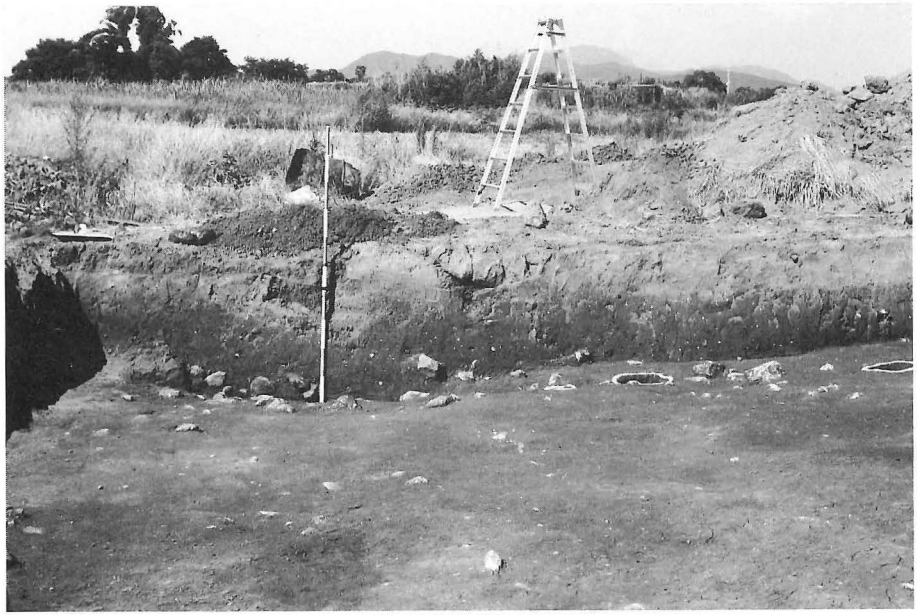
範囲確認調査　T.P.C-21　土層

範囲確認調査　T.P.C-21 検出　柱穴跡

A区　北東壁　土層

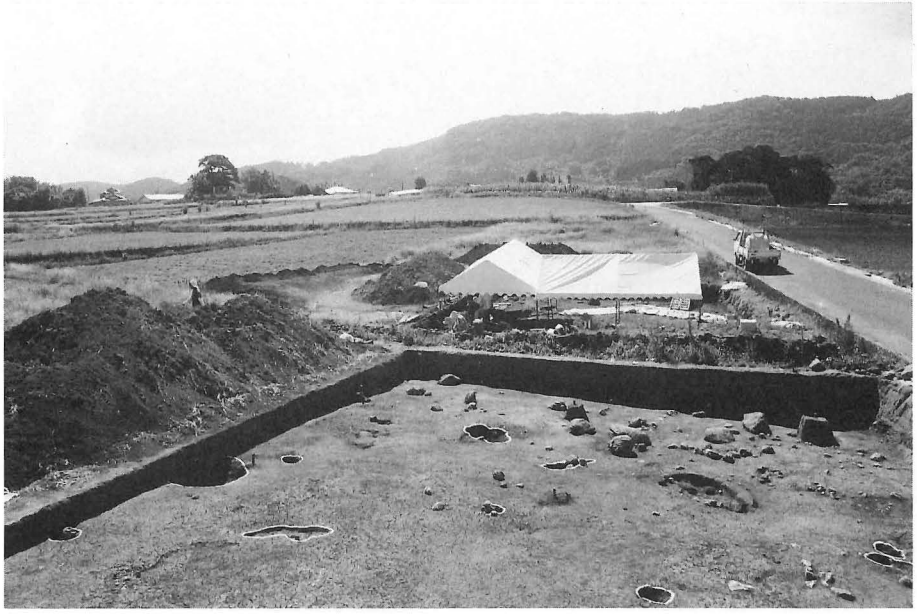
図版 4

A区　南東壁　土層



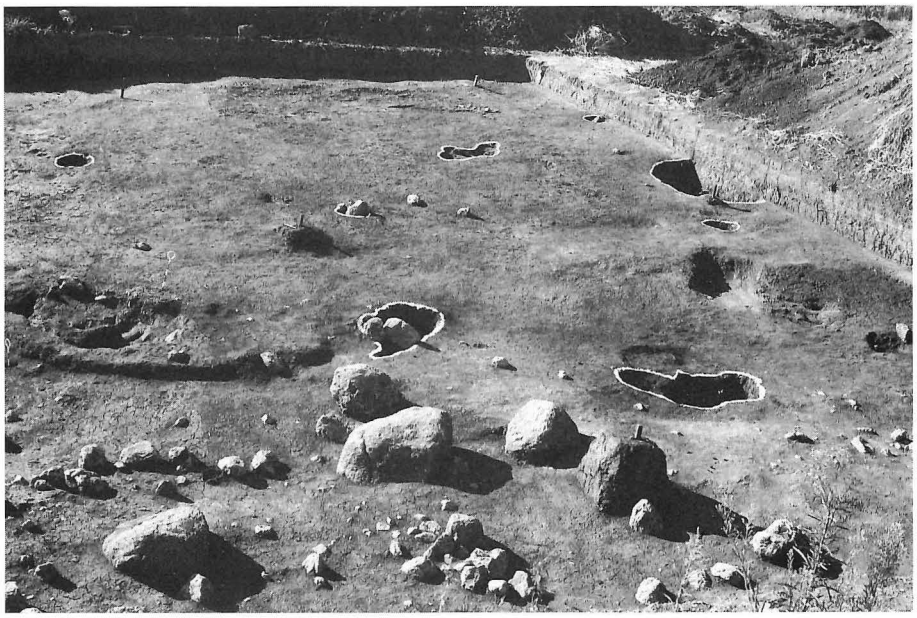
B 区　北東壁　土層

図版 6



A 区　西側より撮影

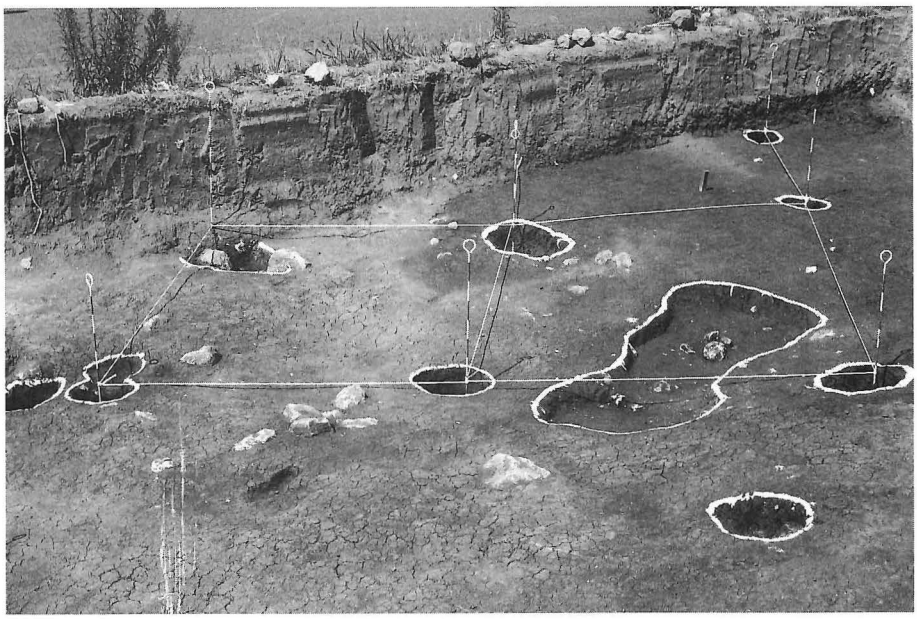
A 区　北側より撮影



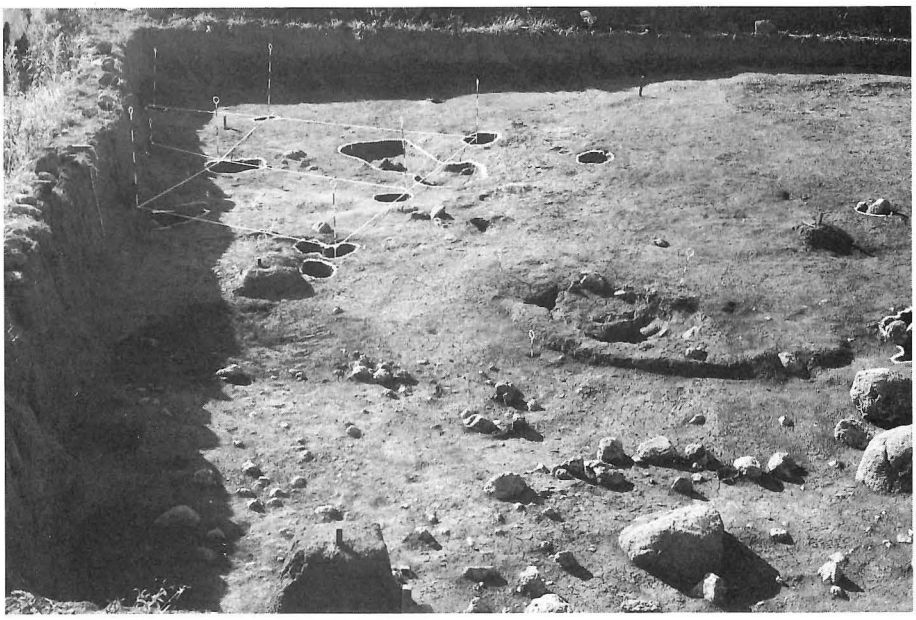
A 区　南側より撮影

A 区　西側より撮影

図版 8

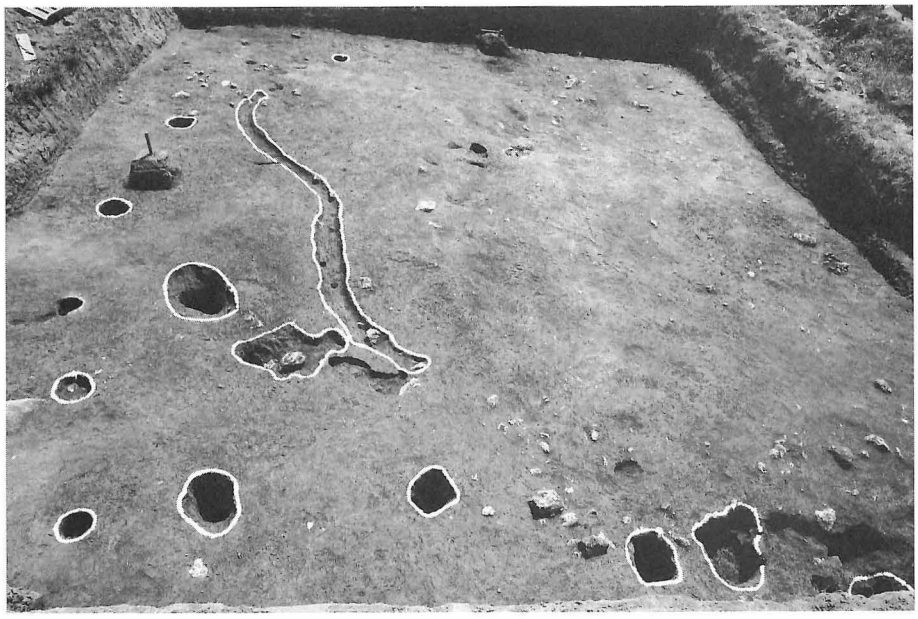


A 区　掘立柱建物跡　東側より撮影



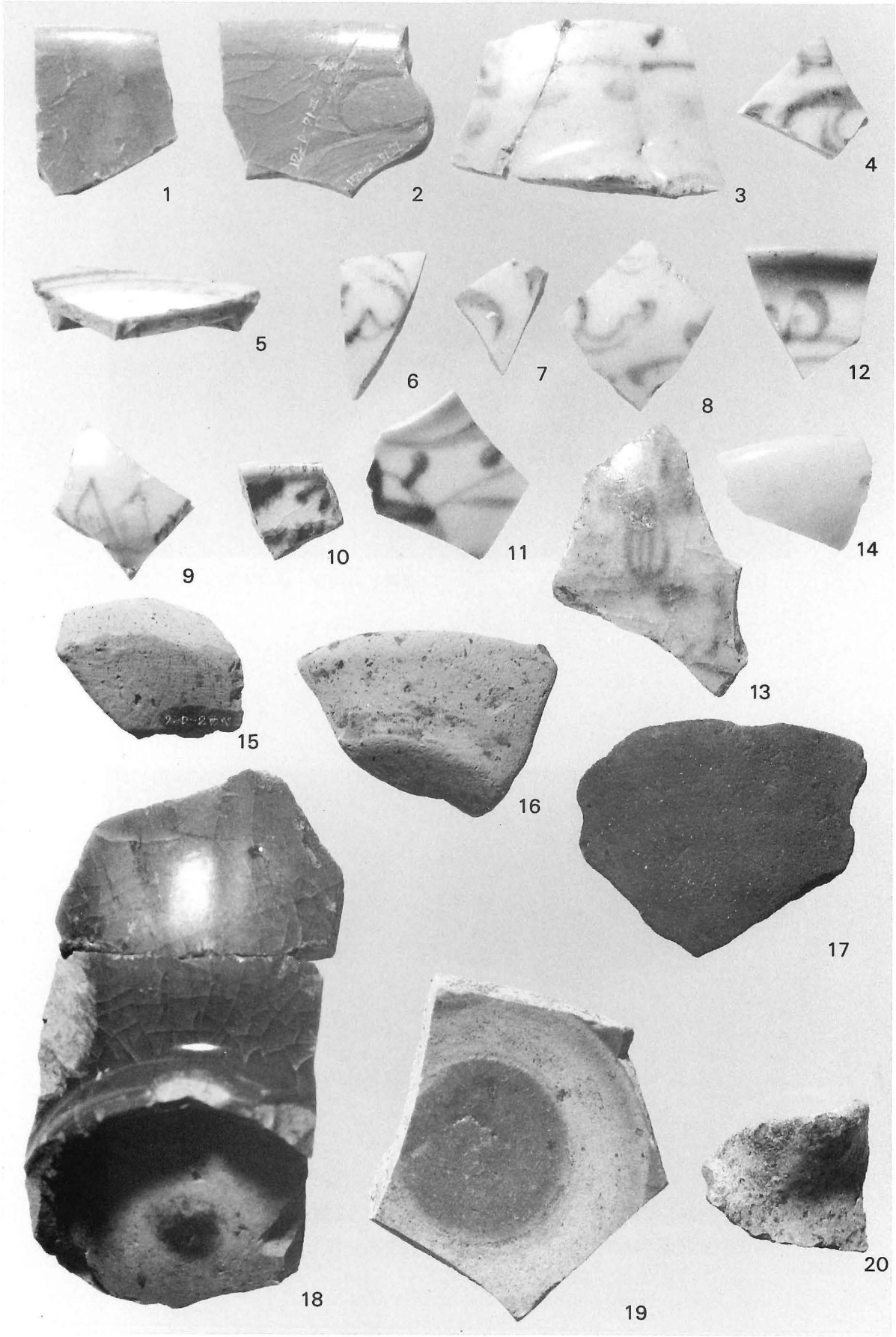
A 区　掘立柱建物跡　南側より撮影

B区　北側より撮影

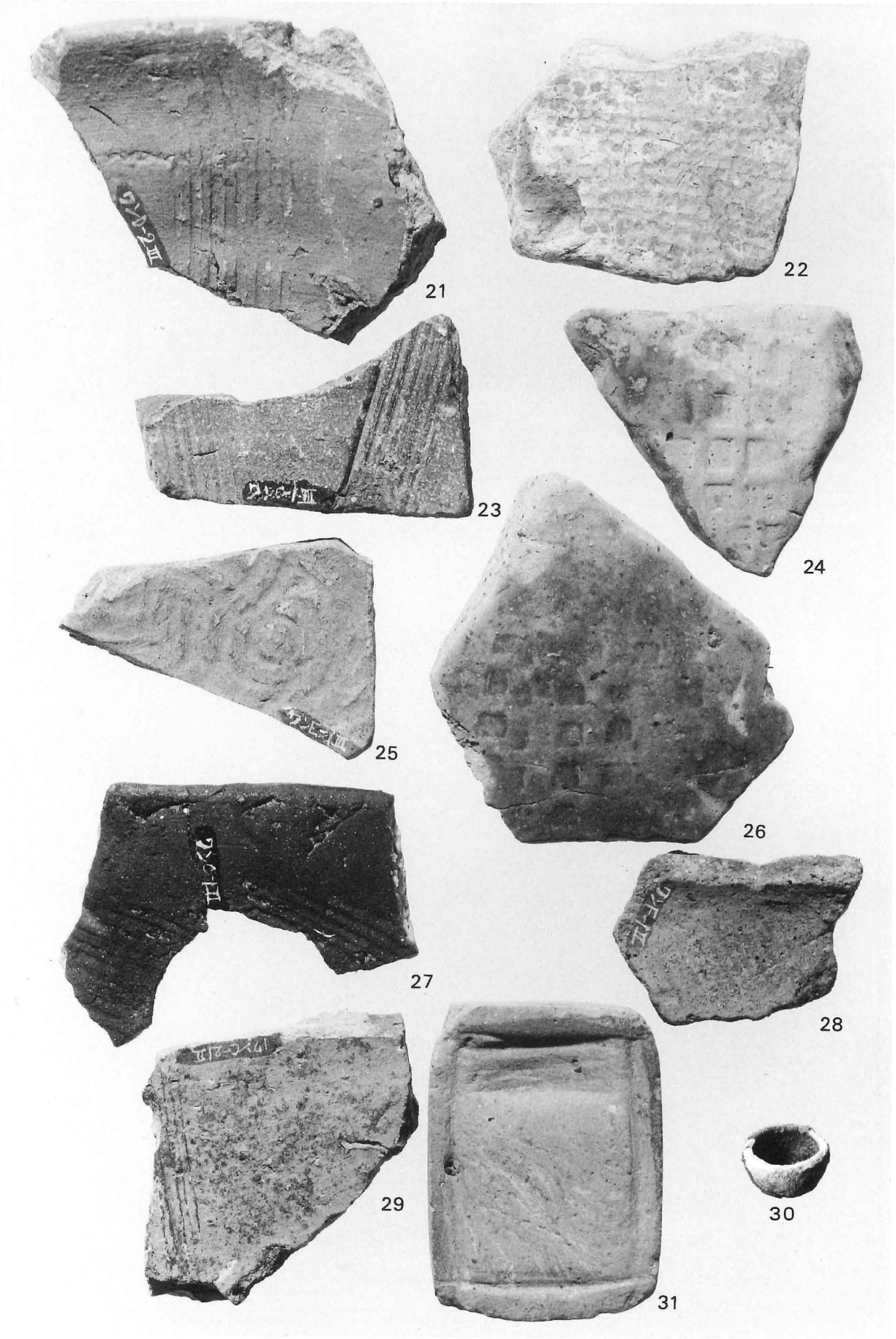


B区　東側より撮影

図版10



出土遺物①



出土遺物②

図版12

出土遺物③

報告書抄録（記載様式）

ふりがな	わんどういせき
書名	湾頭遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	長崎県小浜町文化財調査報告書
シリーズ番号	第2集
編著者名	村川逸朗・松尾昭子
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850 長崎県長崎市江戸町2-13 Tel・0958-26-5010
発行年月日	西暦1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わんどういせき 湾頭遺跡	ながさきけんみなみたかき 長崎県南高来 ぐんおばまちょうやまはた 郡小浜町山畑 あざなかま 字仲の間	37	95—10	32°41′17″	130°11′18″	19930712 ～ 19930727 19940711 ～ 19940805	418m²	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
湾頭遺跡	遺物包含地	中世・近世	掘立柱建物跡	中国製輸入陶磁器 近世陶磁器	

小浜町埋蔵文化財調査報告書第２集

湾　頭　遺　跡

1995

発　行　　長崎県小浜町教育委員会
　　南高来郡小浜町北本町14番地
印　刷　　株式会社　昭和堂印刷